

## 神経筋難病病棟の浴室での移乗の危険を認識する為の取り組み ～危険予知トレーニングを実施して～

竹内菜緒子<sup>1)\*</sup> 森田久美子<sup>1)</sup> 山内友紀子<sup>1)</sup> 圓井和恵<sup>1)</sup> 神農祐子<sup>1)</sup> 田中英美<sup>2)</sup>

- 1) 国立病院機構鳥取医療センター看護部 1 病棟
- 2) 国立病院機構鳥取医療センター医療安全管理室

### Awareness of risks associated with carrying intractable neuromuscular disease patients when assisting them with bathing -Implementation of risk-prediction training-

Naoko Takeuchi<sup>1)</sup> Kumiko Morita<sup>1)</sup> Yukiko Yamauchi<sup>1)</sup> Kazue Marui<sup>1)</sup> Yuko Shin-no<sup>1)</sup> Hidemi Tanaka<sup>2)</sup>

- 1) The 1st Ward, Department of Nursing, NHO Tottori Medical Center
- 2) Medical Safety Management Office, NHO Tottori Medical Center

\*Correspondence: byoutou1@tottori-iryu.hosp.go.jp

#### 要旨

A 病院の神経筋難病病棟での入浴介助では、ベッドと入浴台の患者の移乗を介助者 2～3 名による抱きかかえで行っている。過去にルートトラブルや皮膚損傷のインシデントが発生しており、安全に対する取り組みが必要である。入浴の移乗介助に関わる職員全員で、入浴介助の移乗場面での危険は何かを考え、その内容を明らかにし、また危険を認識する力を向上させることを目的に危険予知トレーニング（以下 KYT）を導入し、調査用紙で KYT 実施前後の危険要因の数値と内容の比較を行った。その結果、KYT 実施により、神経筋難病病棟での患者の移乗における危険要因が明らかになり、認識できた要因の数が有意に増えた。鳥取臨床科学 6(1), 39-43, 2014

#### Abstract

On the ward for patients with intractable neuromuscular disease in Hospital A, 2 or 3 caregivers carry these patients between their bed and a bathing table in order to assist them with bathing. As medical incidents, such as line-related problems and skin injury, previously occurred in this hospital, there is a need to adopt relevant safety measures. The present study involved all staff members of the hospital who carried patients to assist them with bathing. With the aim of: 1) helping these staff members to consider the risks associated with carrying such patients, 2) clarifying these risks, and 3) promoting their awareness of these risks, we conducted risk-prediction training (RPT) for these staff members, and administered a questionnaire survey in order to compare their responses before and after the training. As a result, we clarified the risk factors associated with carrying intractable neuromuscular disease patients when assisting them with bathing, and the number of risk factors noted by these personnel significantly increased. Tottori J. Clin. Res. 6(1), 39-43, 2014

Key Words: 抱きかかえ移乗, 神経筋難病, 危険予知トレーニング (KYT), 危険要因, 調査用紙; carrying patients between their bed and a bathing table, intractable neuromuscular disease, risk-prediction training (RPT),

## はじめに

A 病院の神経筋難病病棟は、常時 45 名程度の患者が入院している。入院患者全員が担送で、そのうち 25 名程度が人工呼吸器を装着している。

入浴は、全面介助で行っており、ベッドから入浴台への移乗は介助者 2～3 名で行っている。過去に、ルートトラブルや皮膚損傷のインシデントが発生している。今後、移乗介助時に転倒・転落・カニューレ抜去等が起これば、重大な事故に繋がる。

坂本<sup>1)</sup>は、「医療現場における作業の手順やそれに伴うリスクについての知識、起こりうる変化に対する洞察力や想像力を養う必要がある。」と述べている。入浴での移乗介助に関わる職員全員が、危険要因について考え、より多く認識できれば、事故防止ができると考えた。そこで、KYT を実施し、KYT の前後で入浴移乗における危険要因を考え調査用紙に記入することで、危険要因を認識する力が向上するかを明らかにする。

## 用語の定義

移乗: 看護師, 介護士, 看護助手の 2～3 名による抱きかかえでの移乗方法。

### I. 目的

職員全員が、浴室での移乗における危険は何かを考え、その内容を明らかにし、また危険を認識する力を向上させる。

### II. 倫理的配慮

A 病院の倫理委員会の承認を得て、研究目的を説明し、個人情報・データ内容は研究以外では使用しないことを説明し、書面で承諾を得た。

### III. 研究方法

1. 研究対象: 神経筋難病病棟に勤務する職員で、KYT 実施前と KYT 実施後とも調査用紙の提出が得られた 33 名(看護師 23 名, 介護士 8 名, 助手 2 名)を対象とした。

2. 研究期間: 平成 24 年 8 月 1 日～平成 24 年 10 月 31 日。

1) KYT 実施前調査: 8 月 4 日～9 月 1 日で、「入浴時の移乗介助における危険要因認識調査」を、自由記載で対象者に記入して貰った。

2) KYT 学習会実施: 9 月 15 日～10 月 1 日で、KYT 学習会の方法は、勤務者 3～7 人で看護師と介護士または助手を 1 つのグループとして行った。KYT は期間中必ず 1 回だけ参加とした。1 回の KYT に要する時間は 15～20 分程度で、第 1 ラウンドの危険要因の発見と抽出された危険要因の見直しを行い、第 2 ラウンドで重要と思われる危険要因の絞り込みを行った。使用するイラストの場面は、兵頭ら<sup>2)</sup>の「医療安全に活かす KYT」にある 41 場面の中から選択し、危険を認識させる目的のため、体位変換、シーツ交換など、毎回異なる場面を使用した。

3) KYT 実施後調査: 10 月 2 日～10 月 23 日で、「入浴時の移乗介助における危険要因認識調査」を、自由記載で対象者に記入して貰った。そして「入浴時の移乗介助における危険要因認識調査」で認識出来た危険要因を明らかにし、KYT 実施前後の数を比較検定した。

3. 研究場所: A 病院神経筋難病病棟。

## IV. 研究結果 (図 1)

KYT は、研究対象者 33 名全員が参加できるようにと、9 回実施した。毎回使用するイラストの場面は違うものとし、よってイラストは 9 場面を用いた。KYT 実施前後の調査の結果、全体で認識できた危険要因は KYT 前が 133, KYT 後は 170 と数が増えた。対応のある t 検定を実施し、 $p = 0.0041$  で有意差が認められた。

内容は KJ 法にて分類し、皮膚などの損傷、チューブ類の抜去、環境、感染、転倒転落、その他(移乗時以外の危険)の 6 つのカテゴリーに分け、KYT 前後で比較した。